

視点

ことばを聴き、子どもたちと心の橋を架ける



子どもとことば研究会代表
元立教女学院短期大学教授 今井和子

今から半世紀も前のこと、希望に燃え保育園に勤めることになった私は、子どものことばに心を躍らせ、保育中ハツとしたことばを夢中でメモしてきました。10年が経過し、ことばへの関心が一層高まり、子どものことばに魅了されていた仲間たちと「子どもとことば研究会」を立ち上げ、各自が記録してきた子どものことばにどんな思いが込められているか「ことばから心の世界を探る」ことをテーマに語りあってきました。従来、子どものことばは北原白秋によって「口頭詩」として採集され、その後は「子どものつぶやき」などと紹介されてきました。が、私はことばを、音声語として「耳で聞くことば」だけではなく、0, 1, 2歳児期の「ことば以前のことば」即ち、表情、喃語、しぐさなどことば獲得の過程で捉える「子どもの体が語ることば」も視野に入れ実践研究をしてきました。これはもちろん3歳以上児にも考えられることです。

*行動こそことばに代わることばである（園でのM君との出会いから）

ことばの遅れが見られたM男（2歳2か月）は、自分の思いが保育者や友だちに通じないとよく物を投げました。特に滑り台など高い所に砂場の容器やカラーボールなど運び込み、友だちに向けて投げつけることがありました。始めはなぜ投げるのか？も考えようとせず、とにかく危ないからやめなさいと叱ってばかりいました。ところが再三注意されても一向に投げる行為は止むことがなかったのです。しばらくして、M男が投げる相手が限られていることに気づき、投げる行為の意味を考えてみました。友だちに関心が出てきたけれども、他の子のように「お～い。○○ちゃん」と声を出して呼ぶことができなかったため、いくら「お～お～」と友だちに呼び

かけても誰も応じてはくれませんでした。物を投げる行為によって、友だちに自分の所在を知らせようとしたのではないかと気づきました。そこで私は、M男が滑り台に物を運び、友だちを見つけて投げようとした時「今、○○ちゃんに、お～い、ぼくがここにいるよって言いたかったのね」と確かめ、私が代わりに呼んでみました。すると呼ばれた子がM男に向かって手を振ってくれたのです。M男も「お～お～」と嬉しそうに手を振ってそこに橋が架かったのです。

その後、M男は滑り台に上がる時は、保育者の手を引っ張って上がるようになりました。物を投げなくても、保育者が代わりに呼びかけてくれることを知ったのです。M男が投げた物は、友だちに呼びかけたかった彼のことばそのものだったのです。

保育者である私はこれまで、目に見える姿ばかり見て「この子は乱暴だ」「物を投げて困る」と決めつけていました。ところがM男との出会いから「なぜ高い所から物を投げるのだろうか？」と子どもの行為の意味を考える、即ち動機、目に見えない心の理由を考えることで観えてくる子どもの世界を感じとっていくことが少しずつできるようになってきました。

こうして私は子どもたちと心の橋を架け始めました。そこにこそ保育の醍醐味を感じてきました。

ところが現代社会は、大人も子どももコミュニケーション力が苦手になっていないでしょうか。橋はかかってもそこを行きかうことば・対話が極めて少なくなっています。対話は、大人も子どもも互いに人格を認め合い、対等な立場で向き合って話をすることです。そこにこれからの教育・保育の礎が築かれていくことをねがってやみません。